

障害をもつ高齢者の詠む短歌を通して、社会福祉系の授業の中で高齢者像を理解する試み

Attempts to Try to Understand the Disabled Aged Persons Through
Their Own Tanka Poems in the Social Welfare Classes

新井幸恵（本学家政学科）*

加藤たい子（老人保健施設みぬまMSW）

関谷栄子（白梅学園短期大学）

西方規恵（白梅学園短期大学）

1 はじめに

人は苦楽の感情を文芸作品にして表現する事により、自己を客観視する手段を持つ。その事により感情表現し自己の安定をはかる事が出来る。自己表現は、すなわち自己実現の手段でもあり、結果として自己を開放し病苦や死の苦痛から自我を守っていると考えられる。またその文芸作品は、他者をも感動させ、その人に接するときに共感と理解を深める役割を果たすこともできる。

その効用を教育に活用した場合に、高齢者の生き方に共感し、社会福祉の援助者としての自己覚知に役立てる事が出来るを考える。日常生活上の援助や介護を必要とする人であっても、精神生活においては自由な発想をもち人格的には優れたものを持つ。そのような人を多角的に理解する事により要介護者を包括的人間として理解できる。

これまでの対象者理解の方法は、客観的な情報収集にとどまり、観察と直接的なコミュニケーションに偏りすぎていた観がある。介護する側から捉えた急迫する心身の「問題点」に焦点を当ててレベルを評価、高齢者像を得るものが多かった。そのため利用者の心理や価値観、心情理解は高齢者と接する事の少ない、かつ生活体験の希薄な学生達の最も困難な分野であった。そこで我々は、援助を必要としている要介護障害者・高齢者の人格を総合的に理解するための方法を模索してきた。その中で当事者の発するさまざまなサインを知るとともに彼等が創作した詩や短歌などの文芸を鑑賞する方法に思い至った。学生にとっては、間接的な方法で利用者の心情や心理及び価値観を時間をかけて推察できる方法である。そのことにより、作者の

* Yukie Arai, The Course of Human Environmental Science

* Taiko Katou, Medical Social Worker, Minuma Nursing Home.

* Eiko Sekiya, Nishikata Norie, Shiraume Gakuen College, The Course of Human Care Science

キーワード：障害を持つ高齢者、当事者理解、短歌による自己表現、よいとこ探しの介護過程

背景に思いをめぐらしたり想像力を働かせ感性を磨く事にもなる。また同級生の感性からも学び合える機会を提供する事にもなる。

このような教育手段は、介護や福祉援助技術の世界ではまだ少ない。一部では「当事者学」として研究が進んでいるがこれらは当事者の手記の研究開発であり、文芸としての批評とは趣が異なる。歌をめぐっては「魂の叫び」ともとれる直接的な心の開放が感じられる。その当事者の心理にどこまで迫れるかは、聞くものの感性によると考えられる。激しく心を悩ますものやうれしく響かせる事がらを励まし文字にしたため、それを他者にも伝え聞かせることを励ましながら人との関わりを深めてゆこうとする援助技術。これはまさに新しい福祉援助技術といってよいのではないか。文学作品の鑑賞というよりも一人称で語る当事者の心の発散するものを受容と傾聴の対象とするべきものと考え、教育の場での活用を試みた。従来の短歌による当事者理解のアプローチを振り返ると、柳沢桂子「癒されて生きる」(1998)⁽¹⁾、安田陸夫「老いと暮らす」(1998)⁽²⁾、吉田継義「新ふつうのくらし・ふつうのホーム」(1988)⁽³⁾、窪田暁子「小春日和の午後に」(1998)⁽⁴⁾ などがある。しかし本研究のように、痴呆等の障害のある高齢者の詠む短歌を、教育の場で活用し当事者理解に資する研究は従来見られない。学生の当事者理解にこのような手法が果たす役割を検討する事が必要であると考えた。

2 研究目的

現場実習を含む社会福祉教育に於いて、痴呆症等障害を持つ高齢者への理解は困難を極めている。障害をもつ高齢者は何を感じているのか、生きがいはあるのか、介護という行為にどのような意味があるのかと、学生は自らに問い続けている。本研究は、こうした問いに答えるために、障害のある高齢者への「介護における人間理解」をめざす一手法として、高齢者の詠う短歌を媒体に学生の教材として活用した効果を評価することを目的とする。

3 研究方法

筆者らは、1987年から埼玉県所沢市A病院にて訪問看護等、在宅医療に携わっていた。所沢市は当時の人口28万、65歳以上人口11000人（高齢化率4%）、「寝たきり」とされる方は398人と把握されていた。訪問看護が、診療報酬上点数化されていない時代にあって、A病院では60人前後の在宅診療を行っていたが、社会的支援機能の未整備や在宅介護技術の未成熟な環境のため高齢者自身、またその家族自身も重度化する傷病、心身の介護負担に呻吟していた。このため、A病院の在宅患者、その家族らによる「家族会」が1987年に発足する。この間の事情については他の文献に譲るが⁽⁵⁾ この家族会活動の中で、ボランティアと高齢者、家族との交流から介護手記集が生まれた。(1996年)⁽⁶⁾ ここには、40編の記録が描かれており介護を受ける立場、家族らの立場からその思いが連綿と書き綴られている。この記録を社会福祉系の授業の中で学生に提供し自由に吟味してゆく試みをこの3年間行ってきた⁽⁷⁾。

その中でも、脳血管性痴呆を中心とする心身の障害をもつKさん（83歳、女性）の詠む短歌は、①生と死を見据えながら悲しみや羨み、楽しみなどを人の目にとらわれず歌っている②乱れながらも短歌形式をもち故郷、母、亡き人たち、自然など多様な場面を詠み込んでいる③歌

作りを通して周囲との心の交流を深めている④歌作りを励ますケアのなかでKさんの心身が活性化されていった、などの点で多くの学生の共感と呼んだ。2000年度の介護福祉士系（80名）、社会福祉士系（20名）、ホームヘルパー講座（80名）の授業では1時間をあててKさんの歌を提示し感想を得た。歌の中から、共感しうるもの一首を選び自由に感想を書くことを課題とし、障害を持ち介護を受ける立場にある高齢者への理解を図った。その中から、特徴的な記述を取り上げ、Kさんの言葉や想いをどのように受け止め学びとしたか、その結果障害をもつ高齢者の全人間的理解の深まりの様相を探究した。中でも感想の多かった10首について44名の感想を選び、主要な部分を抜粋考察し本手法の効果を評価した。

4 K事例の紹介

短歌を詠みすすめるに先立ち、Kさんの事例紹介を行った。痴呆等の障害をもち殆ど人とのかわりを閉ざされていた高齢者が、短歌を詠むに至った経過の理解を深めた。これを通して介護の過程と高齢者の文化活動とが深く関わる事を伝え、Kさんの短歌理解に役立てた。

① 経過

Kさん、女性、83歳、北陸の漁村に生まれ育つ。2女を育てた後、夫を亡くし一人暮らしをしていたが心身の衰えが目立ち始め長女一家に引きとられた。長女一家はその夫の転勤が頻繁にありその都度Kさんも移動し転居を重ねている。幼いころに母、次いで弟を亡くしている。若いころに短歌を嗜んでいたが「女のくせに」と言われて以後縁が無かったと言う。

1984年、長女の夫の転勤で所沢市へ。たびたびの移動や付随する出来事はKさんのストレスともなった。10年程前から高血圧症、脳梗塞による歩行障害、構音障害、また弄便や徘徊などの痴呆症状やうつ状態、白内障による視力障害も進行していた。長女は毎朝、Kさんの昼食の用意をして都内の勤め先へ急ぎ、帰宅は夜7時前後であった。2人の子供を抱え、また夫も仕事に忙しく、Kさんの世話は長女1人に委ねられ介護疲労は危険なほど高まっていく。体は不自由だが口は達者なKさんとのぶつかり合いが絶えなかった。Kさんは、日中1人ベッドの上で便尿をし、食事をし、家人の帰りをひたすら待つという生活が10年も続いていた。食事、排泄などの日常生活は終日ベッド上で、たまに家人が見ていないと這って台所などに出てくる事もあったと言う。診断は脳梗塞による歩行障害と、脳血管性痴呆であるが、いずれも重度化の要因として、介護環境等の影響が挙げられている。

② 訪問看護とのかわり

1991年3月、Kさんは長女とともにA病院の外来を訪れる。「物差しでたたいたら出血した」という訴えで外科で3針縫合している。長女の話から介護疲労の蓄積によるトラブル、誰からもサポートされない孤立した介護環境である事がわかった。1週間後、長女の負担を軽減するために訪問看護の継続を話し合い、最もKさんとのトラブルの多いという入浴援助に関わる事となる。Kさんは、小柄で痩せ型、当初は怒ったような表情、おどおどとしたか細い声が印象的であった。

1994年12月まで、約3年間にわたり2週間に1度、訪問看護を通じKさんと関わった。

入浴援助は、当初は背負われて、ついで這って風呂場まで移動し、椅子に腰掛けシャワーを浴びていたが、4ヵ月後には立位でシャワーを浴びるようになった。更に介助歩行でベッドま

で帰る事が出来るようになる。こうしてKさんは、6ヵ月後には難なくつかまり歩行が出来るようになり、又見守りがあればトイレの使用が可能となった。頑なに心を閉ざしていた浜面のKさんはじき、にっこり笑って訪問者を迎えるようになり、とぎれとぎれに自分の気持ちを伝える事が出来るようになっていた。尚、この間の援助は日常生活動作への支援が主であり、訪問看護場面ではあるが、介護による支援と共通した働きである。

③ 痴呆性老人が短歌を詠むに至る経過

A病院内の在宅患者家族会では1989年より会員に「ゆずりは新聞」という交流紙を発行している。⁽⁸⁾ 毎月発行され、患者、家族、スタッフ、ボランティア、市民などが登場していた。そのなかにOボランティア（60歳、女性）の文章があった。この一文は、「命あるものは死ぬ」と題して「今日は五月三十日、家の前に大きな桜の木があります。緑の葉がいっぱい、小鳥が来ています。一ヶ月前の四月には満開に咲いてピンク色の世界でした。一週間の花の命、桜は私に話しかけてくれました。『いいお天気ですね。私もあなたも生きていますね。』草木、雨風、空の雲や生き物は生命や宇宙を教えてください。日の光、月の光、雨や風と遊ぶのは特別な楽しさです。夫の両親も、私の両親も他界しました。息子たちは上る朝日のように生命力にあふれています。夫と私はたそがれ時の夕陽。美しい夕陽はあっという間に沈み、夜が来ます。順番に死ぬ事は幸せだと思います。どちらも眠りの世界に入っていくのです。」とOボランティアの死生観が書かれていた。（ゆずりは新聞24号1991年6月）

長女宛て置いていったこの新聞をいつのまにかKさんが手にしていた。しかもOボランティアの文章を不自由な目で食い入るように眺め、既にそのページは手垢と指の跡で波打っていた。長女との打ち合わせの後、Kさん宅にOボランティアが訊ねることになるが、間もなく二人の交流が始まり、昔好んで詠んでいたという短歌を詠み始め、デイサービスに出かけるようになり、スタッフやボランティアらと声を立てて笑うようになり、他の利用者と語り合ったりするようになる。関わりから9ヶ月になっていた。Kさんが詠んだ歌は70近くになる。

Oさんに宛てた、不自由な目と手でしたためた手紙も書いている。

「O様、たびたびの御心ありがたく心にとどめております。字もおぼつかなきまことに恥ずかしき次第でございます。R市におりましたときは、一人で生活していました。私はヘイサの性格でございます。自分ひとり。兄がおりましたが、その人先立ちました。

日光と雨に染まりし自然の紅葉 深く美し手のひらに見る

振り返り 想いさびしき 自ら癒しむ

桃のつぼみ 枝に抱かれて やがて開くか

でもこれO様に差し上げるべき無い（ママ）と思います。」

（1991年12月）

「日光と雨に染まりし紅葉」とはOさんが一年も前にKさんへプレゼントした桜の赤い落葉で繰り返し繰り返し眺めていた。「桃のつぼみ」の歌は、Kさんの歌では他に類の無い幸せの予感を歌っている。こうしてKさんの歌詠みが始まりKさんとの交流は沢山の利用者やボランティアにも広がってゆく。Kさんの歌作りは1994年暮れまで続いた。

④ K事例の終結

脳梗塞による心身のレベルの低下、肺炎の併発により、約2年の後の1996年、Kさんは、老衰のため入院先で亡くなる。これを知らせてきた長女はKさんの死後、デイケアでのスナップ

写真や短歌などを整理していて、「皆さんとの交流をしていたころが、母は人生で一番幸せな時期だったのではないかと思います。母が亡くなって初めてそれがわかりました」と語っている。

⑤ Kさんの歌から

Kさんは以後ベット上で多くの歌を書いたが、このうち「ゆずりは新聞」に掲載されたものを中心に眺めたい。眼が不自由なために、字は乱れ、筆力が徐々に薄くなってきたため判読しがたいものも多々あった。また精神の不調からか、痴呆症の進行のためか、徐々に意味の曖昧なものも増えていったが、生活背景や心情から理解が可能であった。

以下の43首の歌を学生とともに読み進めた。

1991年 あらそいて 吾が得るものの何もなし
なにを教えん雲の流れは

庭の紅葉 想えばかなし 一生見る事のなし

幾重にも山ひだ見ゆる 秋の白山
地引く祖父 あまた人たちと和やかに

我よりは三日まえに死にたきといいし夫
十三年前に他界す

しらぬ地を子らに従い暮す身か
ほとけも家も置き去りにして

叱られぬ 小さな気詰まり 家恋ふる
弱き心持ち 行く場なし

おしめと今日も一日送りしか
水を飲むにも 這いてゆく我

この年で ひねもすベットに座しそうです
ベットに座す 1人の想い 味なきか

強く生くひと 羨みて おろかなる我
友よ幸せなるか 我と比べて小さなうらやみ

視力衰えぬ 命尽きるまで 消ゆるな
浜屋顔 冬の砂地に いかに耐ゆるか

命終わるまでの明かり 消ゆるな 念ずる

紅つけて白粉つけて 鏡見る若き日かな
鬼婆に似しと思う 鏡覗きて

1992年 いつ果つる 命かしらねど
生きながらえて出来る事の無く

これほどまでに海恋ふる
日本海の色 忘れめや

いまごろは 蟹とれるころと懐かしむ
家に帰ること 再びありや
一度でいいから家に帰りたい

故郷の庭のもみじ葉 思えば哀し
一生見る事のなし

寂しいとき夜歌作る
心足たる想いかな

1993年 ドイツアカシアの花房 白き砂地に垂れて ゆかしき

きらめく秋日美し 心の隅に残るもの 悲し
バラックの後にかかる虹 神渡し給うか

目うすき我かなし 心うすき我かも

ちゃぶ台に みかん並ぶ 黄の色うつくし

我を負うアライさん いかなるえにしあるか
哀しみ深く

青きさやとれば つぶらな豆の実並ぶ かわいく

選ぶ歌 一首だにあらぬ ほっと息づく

砂丘のねむの花 海の子守歌聞くか 音聞いているか

弟よ 賽の河原で 石積みしているか
想えばかなし きわみなり

悲しい時 母に迎えに来てねと口に出す
幼ないとき 母失われ

勤めの子 いまだ帰らず 唇をかむ
本一冊 くれし子の心嬉しき

生きること むつかしきかな
力なきが 悲し

夜深き 母の名を呼ぶ いずこに いまさむ

ながらえし命 振り向いている 有しやと見る

神いまさむ宮 わが地なりぬ 小さき宮かな

すがりつくひとほしきかな 悲しさに耐ゆ

青い海 地平線の並んで見える 能登半島
西に見える今日一日の終わりを おごそかにまばたく太陽
太陽をうけて深まる雲 汚れの一つだになき

神の絵はがき 書きたもう 絵に手をあわせ ありがたき
限りなく涙流れる (絵はがきを受け取って)

海も山も 夜の世界に 刻々と移り行く
生きる人の 命の安かれ 明日を又安く迎え給えや

1994年 何もせず 一日送って 亡き母思う

家恋し 歌書く紙に 落ちし髪かな

子に叱られて 故郷想い 青き海 恋うか

ベットにて 月見上げる 姿うつくし

哀しさを 身にしみて胸に來し
 木槌もて打たれし思ひする 親大切にしなき吾
 別れし人 いづくにいます 逢いたき夢にでも

裏町の 細き道 一人歩みたき
 細い道 歩いてきた 寂しい道

所沢はまこと寂しき 他国と言ひましようか
 我が宮の祭り 変わりきか

5 結果

自由選択させた歌について感想の多かった歌10首についての、学生の主要な感想は以下のとおりである。介護福祉士コース2年次生を「介護」、ホームヘルパー講座受講生を「講座」、社会福祉士コース2～3年次生を「社福」と記した。

① あらそいて 吾が得るものの何もなし なにを教えん 雲の流れは

- 介護1 それでも生きてゆこうとがんばっていると感じた。少しでも周りのものが、この事について訊ねたりすれば、もっと本当の事が教えてもらえたと思う
- 介護2 空を見上げるのはもしかするとやりきれない自分をお天道様に懺悔しているのかもしれない
- 講座1 常に淋しさや悲しさが前面に出ていて、いつ来るか解らない死と向き合っている家族や人が恋しいようす そんな老人たちをその人なりの満足の行く暮らしができるようにお手伝いするのがヘルパーの仕事かな
- 講座2 遠い雲を眺めて心を落ち着かせようとしているKさん 「しばらく一緒に流れる雲を見ながら、深呼吸して美味しい空気をいっぱい吸いましょう」と言ってみたくなりました
- 講座3 私の母はガンで亡くなりました この歌を読んで亡くなった母の想いがすこしはわかったような気がしました 私は介護の経験が無いので老人の思いはわからないところが沢山あります
- 社福1 人の介護を受けるという事の辛さ 今まで1人で簡単に出来ていた事も今では人の手を煩わせなければ出来ない こんな自分に対するもどかしさ、情けなさが溢れて

いる 娘に本当ならありがとうといたい自分が自分に対するイライラが募ってつかかってしまう 本当はこんな事を言いたいのではなかったのに…娘との言い争いの後1人で思うのはそればかり 更に深い後悔に襲われていく

社福2 Kさんは本当は自分ひとりで誰の世話にもならず暮してゆきたいと思ってるのではないかと思います 娘の助けなしでは暮していけないことを知っていても、どこかで1人で生きていきたいという気持ちがあると思います 福祉の世界は奥が深いと思いました

② しらぬ地を 子らに従い暮らす身か ほとけも家も置き去りにして

介護3 何もかにも人に従わなければならない無力感 これから介護してゆくにあたり施設入居者もこういう思いを持っているかもしれないという事を頭に入れて接したい

介護4 今住んでいる所を「知らぬ地」とあらわしている お年寄りにとって、慣れ親しんできた環境の中で暮らすことの援助が必要だと感じた

介護5 長年生活していた所に居たかったことが伝わってくる

講座4 ご家族は懸命にお世話されていても、親の持つこのような寂しさには気づいていないかもしれない

社福3 お年寄りにとって転居、呼び寄せというものがいかに辛いものであるかがわかりました 私は親は子供と暮らすのが一番と思っていたので、この事実は驚きでした いろいろなことを乗り越えてきた思い出深い家が、どれほど大切なのかと思い知りました

社福4 呼び寄せ老人の、家族や地域からの孤立、孤独がわかった

③ 叱られぬ 小さな気詰まり家恋うる 弱き心持ち 行く場なし

介護6 自分の世話が家族の自由を奪っていると感じて 落ち込む事もあるだろう 家族に介護されていることから来る悩みというものはとても複雑なものだと思う 「心の行き場が無い」という表現の寂しさ

介護7 介護される側にとっては、その気持ちというものは本当に小さくなってゆくのかもしれない 弱い心になってしまうのかもしれない 介護する側は忙しさの中で、そういう気持ちになかなか気づかないものなのだという事がわかる

講座5 寝たきりになったことで周りすべてに気兼ねしながら生きてきた いちいち「ありがとう」と言うのがわずらわしくてと言った老人がいた 心休まる場所がなくなってしまった 元気で自由に充実して生きていたころ、家族も仲良く笑いの絶えなかったころの家がKさんにとっての家なのであろう といっても、もう帰れない…自分の気持ちの整理がつかない状態なのだろう

社福5 寝たきりになったことで体以上に精神的にもかなり弱くなってきてしまった 孤独ということが与える影響が大きいのではないかと 家族と一緒に暮らしているから幸せということも無いし、施設にいるから不幸せという事も無いのだと思った

④ おしめと今日も1日送りしか 水を飲むにも這いてゆく我

介護8 施設にはおしめをしているかたは沢山いる これからその介護を担おうとする私にとって介護を受けなければならない人の気持ちが伝わってきて複雑な気持ちになった Kさんのように自分の気持ちをストレートに伝えられる人の言葉を聞く事で、伝えられない人の気持ちを少しでも理解しようと思った

介護9 私たちは実習でおしめを手早くきれいに取り換える事しか、気を配る事が出来ない援助になっている可能性がある 介護される側として一番屈辱的なことなのだから「排泄介護」と機械的にならないで、いろいろなコミュニケーション方法をとることが大事なのではないか

水を飲むにも這っていく自分の姿に悲しさを感じているが、一方で何か開き直っているようにも感じられる

講座6 それでも老いてからこんな歌を作れて、どうしたらこんな能力を引き出すことが出来たのかと思いました 周りの介護者が病の面だけを見ずにKさんの全体を見て健康な年を掘り出していったからでしょうか

講座7 家の中にいても「ひとり」を感じる事が多かったのではないだろうか

⑤ 視力衰えぬ いのち尽きるまで 消ゆるな
命終わるまでの明かり 消ゆるな念ずる

介護10 力強い歌だ 生きていたいという力強い意志が感じ取れる

介護11 じぶんの命の終わりも自覚している 私たちの年代では自分の最後をまだ意識していないが、85歳の作者はほかにも私たちが思いつかぬような事を考えているのではないかと

介護12 視力の衰える不安 行き場の無い不安をこの歌を詠む事によって少しでも埋め合わせているのだと感じた

介護13 一日一日、一生懸命に生きている事が感じられる Kさんの歌の中で一番それが感じられる歌だ 小さく弱い老人の中にある頑張っている姿が見える

社福6 まだ生きていたいという熱い思いが感じられる お年寄りになると衰え行く視力だけでもこんなにすぎるようなきもちになることがわかった

⑥ いつ果つる命かしらねど 生きながらえて出来る事の無く

介護14 私も強くない だから簡単に「もっと前向きに」とはいえない 言葉の裏側に隠されている真実が見えるような介護者になりたい

介護15 もし私がKさんを介護する立場であつたら、こちらからの一方的な援助ではとても満たされる事は無いだろう 介護される側の気持ちを知り相手の立場にたつという事がとても重要なように思えてきた

介護16 それでも生きつづけることが今の自分に出来る事だと言い聞かせているのかもしれない

講座8 利用者さんどなたにもある共通の心の奥底の思いは、この歌の心だと感じます 私がヘルパーとして何うこと自体、孤独や喪失感、無念の思いをより深く実感されているのかと思う事も度々です「死んだほうがまし」と嘆かれる方の前ではどんな慰めも空しく響きます せめて精一杯心を傾けてお話をお聞きする事でしょうか

⑦ 寂しい時夜歌作る 心たる想いかな

介護17 心たる想いかなと思って戴けるように援助してゆくのが私たちの目指す所ではないだろうか

介護18 心の隙間を歌を書く事で埋めているのだなと思った 歌を詠むことが生きがいになっているのだな

社福7 元気な私たちでさえ、親や友達と喧嘩した日の夜は一人ぼっちの気がして淋しくなります そんな時日記などで書き連ねると心が晴れてきます そんな時Kさんは過去の思い出や、故郷を言葉にする事で自分を癒してきたのだと思います Kさんに

とって歌を作ることが生きる力になっていたのでしょう

⑧ 悲しい時母に迎えに来てねと口に出す 幼いとき母失われ

夜深き母の名を呼ぶ いずこにいまさむ

社福 8 いくら年をとっても実の母はこんなに恋しいものなのだと知った 弱冠20歳と、もう85歳の65歳も離れた存在だけれど同じことを思い考えるという事で共感した

介護19 たとえ年をとっても、また年をとったからこそ自分の全てを包んでくれる存在を求めるのではないか

介護20 人間にとって母親がこんなに偉大な存在だとは思わなかった

講座 9 高齢の方が母親を思うなんて思っても見なかった

講座10 ヘルパーとして、このお母さんを求める気持ちを受け止めてあげられたらどれだけこの方が癒されるだろう そういう深い心を受け止められるヘルパーになりたいな—と思いました

⑨ すがりつくひとほしきかな 悲しさに耐ゆ

介護21 辛く長い寝たきりの生活 家族の重荷になっている自分 そしてこれからも耐えてゆかねばならないことを思うと、何かにすがりつき苦しさから解放されたいと願うのだろう

介護22 心の底から淋しいと言ってるように感じます この悲しさ、淋しさを聞いてくれる人が必要なんだと思った

介護23 誰かに傍にいてほしいんだなと感じた

社福 9 そういえば私の祖母も何だか悲しそうな顔をしていたときがありました 家族と一緒にいてもいつもひとりぼっちのように見えました 少しボケていて誰からも相手にされず「わかった」「わかった」といった感じでした 今思い出しても抱きしめておもしろ泣かせてあげたくなるような顔をしてました

⑩ 海も山も夜の世界に 刻々と移り行く 生きる人の命の安かれ 明日を又安く迎え給えや

介護24 私はこの歌がとても凄いものに感じられた この歌は老人の時を追うごとに近づい

てくる死への心象ではないだろうか 足元に近い距離に死がある 老人は孤独や、絶望や空虚を抱えて夜を迎え眠るのかもしれない その不安は安心した明日につながる 命の安らぎ それが老人の切なる願いなのだと伝わってくる 介護者は言葉にされないその声に気づいたり痛みを察する事が必要だと考えさせられた 痴呆のある人がこれほど痛みを持ってる事に正直驚いた はっとさせられる歌だった

講座11 この歌が最も人生を肯定したものだった また家族への気持ちも温かなときなのだろう 周囲のケアでここまで気持ちを高める事が出来たのではないだろうか

6 考察

以上Kさんの10首の歌について介護福祉系24名、社会福祉系9名、ホームヘルパー講座受講生11名、計44名の主だった感想を見てきた。年齢や経験でヘルパー講座受講生に、自身の経験と比べたものや、事例を踏まえて具体的ななかかわり方にまで発展してゆくものが見られたが、大きな差異はなかった。多くのものは、日ごろ短歌に親しむ機会は少なく、短歌による感情表現をどの程度受け止められるか危惧したが、いずれもケアの本質にかかわる深い洞察を得ていた。Kさんの介護の過程を伝える中で獲得されていたものと思われる。

以下に障害をもつ高齢者の詠む短歌を通じて、どのように高齢者像の理解が得られたか考察する。これを通じ学生の高齢者理解の手法としての有効性を検討したい。

1) 介護を受ける立場にありながら、短歌表現により再び生き抜こうとする高齢者の自己実現過程の理解

虚弱な高齢者の中でもとりわけ「寝たきり」や痴呆症と言われる人々の声はなかなか表現されず、聞き取られない事が多い。おしめ、ベット、独り、争う、叱られぬ、勤めの子といった言葉の中から周り全てに気兼ねして生きる老人の、孤立させられてゆく姿を読み取りながらも(介護7.8.9.21社福1.2.5. 講座5.7)「他者からの助けなしでは生きてゆけない事を知っていても、どこかで一人で生きてゆきたいという気持ち」(社福2)を持っていることや、また黙ってベットに横たわっている人々の中に、こうしたことを表現できる力を読み取っている。

全体に漂う悲哀、無力、喪失感のリアルさに惑わされず、学生は「それでも生きてゆこう」とするKさんの意思、力を感じている。(介護1.8 講座11)更に「⑤視力衰えぬ」の歌に対し、特に生への意思を感じるものが多くあった。視力を失いたくないという表現の中に小さく弱い老人の中にある命をいとおしむ、人との関わりを求める篤い思いを発見している(介護10.12.13.16. 社6.11)また、人が恋しいという切々とした感情をしっかり受け止めている(講座1)

Kさんは、たまたま勧められた短歌という表現の中に生への意味を見出していた。ベットの中から自然を見、ベットの中で過去に触れた自然や、愛する人々と心を通わせている。雲、庭の紅葉、浜屋顔、日本海、蟹、月、太陽、道、砂丘、ねむの花、などの自然や仏、神、故郷、母、などに頻繁に接近している。これらは単に歌作り上の修辞や、類型とは片付けられない心の言葉が感じられる。これらをキーワードとして学生は、病から回復しようとする力を読み取っている。(介護2.18 講座2. 社福7)「自らを放棄させる事なく再び未来に目を向けて生

き始める」(フランクル1961年)⁽⁹⁾とする生の実現を見ている。

2) 介護の働きによってエンパワーメントされる高齢者像の理解

介護にあたるものが病の面だけを見ず、ふとした事から知ったKさんの健全な力を活用した事に着目している。更にボランティアらとの共感的な関係の中で、短歌の内容が形式を超えて内面の表現に深まってゆく様を見据えている。(社福7・講座6.11) また短歌作りは「余暇活動」のレベルから次第に生を支える「命綱」の様相を帯びていったことに、かかわりの中で「心足る思い」と表現された生きる力に変わりゆく様に気づいている。(介護17.18社福7)

学生はそれではどういう立場でKさんに向き合うのか、自ずと答えを出している。一緒に、言葉にならない声を聞く、心を傾けて聞く、言葉の後ろに隠されている真意に気づく、相互に思いが通い合うかかわりをと述べている。(講座1.2.9.11, 介護3.8.9.14.15.17.22.23.24) Kさんの表現から、障害を持った高齢者の心の様相が決して一方的な指導、助言に馴染まないものである事も伝わっている。「心足る想いかなと思って戴けるように援助する事が福祉の目指す所ではないか」としている。(介護17)

石田は「問題行動の中に内発的な生涯発達要求をみる重要性、あるいは表情に乏しく感情も要求の発露もつかみにくいと思いがちな寝たきりにある人の対象的活動(いくつかの器官を能動的に機能させ、外的な対象へ働きかけている活動)により注目してゆく事の重要性。そして、その個々人の対象的活動の観察を基礎とした介護者と利用者双方による目的意識的な相互作用の重要性」を述べ、こうした活動を「よいとこ探しの介護過程」と提唱している。⁽¹⁰⁾ こうしたことを学生はK事例から、介護における視点が、高齢者の生命やその質を左右する事を学んでいる。

3) 介護を受ける立場からの家族像の理解

引き取られた所沢市を「②知らぬ地を」と表現する歌はとりわけ若い学生には驚きや不可解な点であった。「10年間も住んでいて知らぬ地とは」と絶句するものもあった。(介護4 社福4)「住み慣れたところにて生涯を閉じたい」という思いを押して「子らに従い」転居したものの、家族との折り合いがうまくいかなかった時の追い詰められた思いも見つめている。(介護6・社福5) また家族の中にあつての孤独にも事実として思いを寄せている(講座4.7) 心身が衰え生活行動圏の乏しい高齢者にあつては大きな問題だが、家人に気づかれる事は少ないようである。「祖母は家族と一緒にいても、いつも一人ぼっちのように見えました」(社福9) と思い返している。施設入所者の孤独に思いを寄せるものもあり、これらに寄り添う介護にもとめられる対象理解の質に及ぶ者もある。(介護3) 家族もまた困難を抱えながらも生き抜こうとする人々である。その家族とのかかわりの中で苦しみつつも慕いつづける、介護を受ける高齢者像の実像を捉えようとしている。

7 結論

1) Kさんの事例から、短歌による表現は①時系列にまとまった形で残す事が出来、成立の過程がわかる②直接的には伝えにくい事を第三者に、間接的に率直に表現することが出来る③痴呆であってもかつて獲得していた表現方法は馴染みやすく、かつ短い文章で一定の思いを詠み込めるという特徴がある。短歌を通して、介護を受ける障害老人の心を理解出来る事がわかつ

た。

2) 障害を持つ高齢者に時間をかけて励まし、短歌を詠もうという心境に至る経過を振り返ると、まさに介護の本質に触れる過程を見ることが出来る。

介護とは心身の「問題」に対応する働きのみならず、個々の人間に本来ある力を励ますことにより生活全般の回復を図る過程でもある。死に至るまで生き生きと、その人らしさを支え続ける営みでもある。この点を理解するために障害を持つ高齢者の詠む短歌を素材とした高齢者理解の方法は有効であった。

3) とりわけ、本事例は痴呆が進行し、かつ生命の危機に瀕していた時期に、それでも生きたいという思いを連綿と伝える短歌でもあった。ここから障害をもつ高齢者の心、思い、願い、生きがい、支えとなるものなどをよみとることができた。人はどんな過酷な状況にあっても、自らを支える力を本来持つことを理解する手法として有効であった。

以上のように、障害を持つ高齢者の詠む短歌を教材として学生の高齢者像の理解の為に活用した結果、その効果は大きいと認められた。

更に、今後多くの事例収集に努め、当事者学の一つとして文学との学際的研究が図られれば一層理解を深める事が可能となろう。

最後に、こうした学びを提供してくださった今は亡きKさんのご冥福をお祈りして終わりたい。

参考文献

- (1) 柳沢桂子「癒されて生きる」岩波書店、1998年 p108-110
- (2) 安田陸夫「老いと暮らす」岩波書店、1998年 p19-25
- (3) 吉田継義「新ふつうの暮らし、ふつうのホーム」任運荘発行、1988年
- (4) 窪田暁子「小春日和の午後に」ドメス出版、1998年
- (5) 関谷栄子他「介護負担感の強い在宅患者家族へのグループ援助の意義と課題」白梅学園短期大学紀要 第36号 2000年
- (6) ゆずりはの会編「手抜きでドンマイ」桐書房 1996年
- (7) 新井幸恵他「社会福祉系授業における当事者参加の教育効果を考える」十文字学園女子短期大学研究紀要30集 1999年
- (8) ゆずりはの会編「ゆずりはの仲間達～『ゆずりは新聞』にみる在宅患者。家族会のあゆみ」1996年 p 58
- (9) V.E フランクル「夜と霧」みすず書房 p71 1961年
- (10) 石田一紀「その人を理解するための介護過程」p40 船津守久他編「介護における人間理解」中央法規 1999年